熊　猟

佐賀　彩美（さが　あやみ）
アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モントレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。全国通訳案内士。

昨年、道内では羆による人身事故が多発しました。これは羆の保護のため、それまで行われていた春熊駆除を1990年に禁止した結果、羆の生息数が倍以上に増えたからだといわれています。その結果、今年から春期管理捕獲として春熊駆除が再開されました。アイヌ民族にとってはその賢さとともに、漢方薬として珍重される胆のう、毛皮や肉を授けてくれるキムンカムイ（羆）は最も重要な神様でした。北海道がアイヌの国であった時代に、羆の数が増えすぎたり、逆に減りすぎたりということは起こらなかったのは、アイヌの人々が羆を単なる獲物としてだけでなく神として尊重し、敬意をもって捕獲する一方、ヒグマの生態を常時把握して、捕獲しすぎるということはなかったからだろうと思われます。また、子熊をある程度まで育ててイヨマンテで神の世界に送り返すという伝統行事も、現実的には羆が増えすぎ、飢えによる「ともぐい」や抗争を調整することに役立っていたと思われます。アイヌ民族のような考えをもっていないと、利益に目がくらんで獲れるだけ獲るということになりがちです。このような人間の欲のせいで絶滅に追い込まれた生き物は、エゾオオカミをはじめ、世界中に無数にいるでしょう。

アイヌ社会では、誰かに大切な熊猟に連れて行ってもらえるというのは、その人から、そして神からも信用されているという人物評価を意味しました。猟で羆を「授かる」ためには、同行する人の人選を含め、大変厳しい決め事があったそうです。身内に不幸があった人は神様に好まれないイソサックㇽ（iso－獲物 sak－欠く kur－人）と呼ばれ、猟に参加させてもらえません。実際、このような人が参加すると、労苦はあっても獲物を得られなかったといいます。逆に神様に好まれる人はイソンクㇽ（iso－獲物の un－ある kur－人）です。また、羆のなかには人に加害する悪い羆、ウェンカムイ（wen－悪い kamuy－神）またはウェンユㇰ（wen－悪い yuk－獲物）もいます。アイヌの人々は羆の足跡でウェンユㇰを見分けることができるといいます。足跡が明瞭で、いかにもノッシノッシと歩いている羆は（性格の）良い羆、前に重心があって足の後ろがしっかりと地に着いていないとか４つの爪の跡しかついていない羆は「何か企んでいる」性格の悪い羆と判断されました。性悪羆の企みは、例えば、先に行ったように見せかけて、待ち伏せして人を襲うというようなことです。足跡からおよその体形や年齢を予測するということは羆の研究者も行っていますが、足跡から羆の性格の良し悪しまで推測するような観察はしていないのではないでしょうか。善良な羆は人里から離れた山の高い、食糧の満ちあふれたところにいるそうで、ヌプリノㇱケクㇽ（nupuri－山 noske－中央 kur－人）といい、性悪な羆はヌプリケスンクㇽ（nupuri－山 kes－ 端に un－いる kur－人）で、人里近くに現れる羆は、羆のテリトリーから追い出された飢えた性悪な羆が多いとのことです。羆は普通２頭ずつ子どもを産みます。たまに３頭産むことがあると３頭目は性格が悪くなるそうです。これは、母熊の乳房が２つしかないため、十分に母乳を飲むことができないためだと言われます。

羆を授かった場合は、簡単でも必ず魂送りの儀式が行われました。最も重要なのは、「なるべく早く蘇って（帰ってきて）ください」と述べることでした。これは、人の助言によって更に蘇りが早くなるためです。アイヌ文化では生き物は死んでも魂は生き続け、再びかたちのあるものとしてこの世に戻ってくると信じられていたのです。羆の頭数が減ったら猟をやめ、増えたらまた捕獲を再開するというご都合主義ではなく、アイヌの人々のように、生き物の尊厳を大切にしつつ共存することはできないものかと思います。

＊本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。

藤村　久和　氏　北海学園大学名誉教授　北日本文化研究所代表　アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療（整体ほか）等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査（北海道教育委員会）に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『アイヌのごはん』（監修、デーリィマン社、2019年）、『平成20～令和４年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査１～14』（北海道教育委員会、2008～2023年）等。